
交差

亜優紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

交差

【Nコード】

N6763L

【作者名】

亜優紀

【あらすじ】

OLの夕子は短大出身の25歳。社内恋愛も順調！…と思いきや！？

様々な人間模様を交えながら明るく楽しく、ときには切なく(?)お送りします、多分ラブコメディーです。

初投稿なので、生暖かく見守ってください。よろしくお願いいたします。

はじまりはいつも

夕子はあつと声をあげた。でもそれは室内に響き渡るような大声ではなく、あつと軽やかに出たのだった。

しかし周りはその夕子に無関心のように見えた。

いや、余裕があれば構いたかったというのが正当だろう。

なんといつてもここは会社。しかも夕方は5時10分前を時計の針が指している。定時退社。夕子の勤める会社は夕方5時30分が定時。を指している者、残業になるとわかりつつも新たな案件に手を出す者、みなそれぞれに仕事を消化している。

そんな夕子の声に反応した人間がいた。

夕子からみたら右斜め後ろ、背向かいに座っていた男が顔だけこちらに向けた。夕子も男の顔を見る。

男は目で微笑むとすぐにまたパソコンの画面へ顔を戻す。

もちろん夕子も同じく目で微笑み、すぐにまた仕事へ思考を戻した。

男は耕平といった。夕子の恋人であり、会社では先輩だ。といっても、仕事上あまり関わらないので気が楽だ。

いわゆる社内恋愛だが、男の方が社内に知れ渡るのを嫌った。理由はいちいちからかわれるのが面倒だそう。

そういうところは私の方が図太いのよね、と時々夕子は思う。

夕子があつと小さく声をあげたのはもちろん理由があった。

今日は久しぶりに耕平とデート。しかも平日に。

お互いに仕事のペースが違うから、なかなか平日の夜は会えない。

そんな大事なことを今朝振りに思い出していたの「あ」だったのだ。とはいっても、二人とも最近仕事は落ち着いてたし、デートの舞台のレストランは6時半に予約をしていた。

夕子と耕平が目で微笑みを交わしたのをふと目撃した者がいた。夕子の向かいに座る 女というよりはまだ女の子だ はるか夕子が声をあげる前から夕子を見ていた。

今日は夕子に話を聞いてもらうために夕食に誘おうとして、タイミングを計っていたのだ。

ところが、意外なものを見た。夕子と耕平がなんだか目配せしたように感じた。

考えすぎかもしれないが、なんだかそんな風に見えた。

「夕子さん、あの…」

「どうしたの？」

「急なお誘いですみません、今晚って空いていますか」

「ごめん。今日は先約があるの。また今度誘ってよ」

「わかりました」

夕子は両手を顔の前に合わせながら申し訳なさそうに、はるかの誘いを断った。

耕平は仕事に打ち込みながらも、考えていた。

「あ」とか言ってたけど、まさか今日の約束忘れていたわけじゃないよな。

でもそんなことはないはずだ、と耕平は確信を持っていた。

夕子はいつもよりはおしゃれをしていたし、お気に入りのピアスもつけている。

さりげなく時計を見ると5時を少し過ぎていた。もうひと踏ん張りだな。

「今日はなんか落ち着きないわよね」

横から意外な感想が入る。

「そうですね？」

なんでもない風を装って答える。今日は時計を見すぎたな。

耕平に指摘したのは隣に座る絢子といった。耕平の3年先輩である。

「なんか予定あるの？」

「からかうように聞いてくる。」

「まあそんなところですかね」

さらっと答えておく。あんまり詮索されるのも好きじゃない。

「そう…」

絢子はそう言ってそれからは何も聞いてこなかった。

夕子は6時過ぎには退社をして、念入りに化粧直しをして会社を出た。

待ち合わせ場所は会社から少し離れたコンビニ。本当に耕平は徹底していると思う。

でもたまにあの完璧さ加減についていくことに自信を失いそうになることがある。

図太い上に、大雑把だもんな。繊細になり切れない自分を仕様がないと思いつつも、好きな人のためならどうしてそこまでできないのだろうと悩むこともあった。

そんな事を思いながら少しずつ夏の色を帯びてきた夕暮れを小さなため息について眺めた。

「ため息なんかついてどうしたの」

待ち人に自分のため息を聞かれたのを少し後悔した。

「なんでもない。今日もまあまあ働いたなと思って」

「行くところか」

「うん」

冗談めかした風に胸を張って左腕を差し出す耕平。もちろん夕子はその左腕に右腕を絡める。

濃いラベンダー色が広がる空に二人の笑い声は吸い込まれていった。

レストランは人気のフレンチということで平日にも関わらず混み合っていた。

耕平は首尾よく予約をしていたので席はもちろん窓際。

屋内は快適な温度と湿度に保たれていた。外は梅雨が始まる前独特のむっとした空気で、夕暮れの空はなんだか淀んでいるように見え

た。

前菜の鯛のカルパッチョを口に運びながら耕平が聞いた。

「今日澤井さんに今晚空いているか聞かれてただろう」

「もう、そんなところまで聞いていたの」

笑いながら夕子は言う。はるか澤井はるかといった。

「聞こえたんだよ。悩みでもあるのかな」

「話を聞いてもらいたみたいなんだけど、どうしても最近彼女とタイミングが合わなくて」

このバルサミコを使ったソースは少し酸っぱいと夕子は思った。

「ふうん」

「また改めて時間作って話し聞いてみるよ」

「そうだね。それでさ」

「なに？」

耕平は少しためらってから口を開いた。

「もしかしたら転勤になるかもしれない」

「えっ」

飲もうとしていた白ワインには口をつけずに夕子はまたテーブルへ戻した。

告白

3日後。土曜日。外は梅雨の予行演習とばかりに雨が降っている。夕子は水曜日の出来事を頭の中で繰り返し返していた。転勤か……。まだどこへ転勤になるかは決まっていないうだが、つい先日打診されたという。

夕子には多少の心の準備をしておいてほしい、とのことで先だつての報告だった。

「ものすごく遠かつたりしたらどうしよう……」
ひとりごちてみる。雨が激しく降る。雨で週末の街は煙っていた。遠くから見守ることができらるうか。もちろん耕平のことを信じていないわけではなかった。

耕平から転勤の話が聞かされてからは料理もどうやって食べたか、味なんてもつてのほか、覚えていなかった。前菜のタイミングで言われたのはなんだか勿体なかった。デザートはなんだったっけ、とひとりで頭の中をめぐらせて、紅茶のシフォンケーキに甘さが控えめの生クリームが添えられていたのを思い出した。でもまだ正式に決まっていないうだし、と夕子は気持ちを切り替えようと読みかけの雑誌を眺めることにした。

澤井はるかには携帯電話を握り締めて画面を睨んでいた。もうこうして10分は経つ。

携帯電話の画面には夕子の名前と電話番号が表示されている。もう少しで母親が夕食の支度を始めるだろう。そうしたら姉が手伝いを始める。はるかは根っからの末っ子体質で、姉に咎められてから重い腰をあげて家の手伝いを始める。会社ではちゃんとしてるんだからいいじゃない。それがはるかの言い分だがもちろん却下だ。

姉からお呼びがかかる前に夕子に電話してしまおう。深呼吸をして、

思い切って通話ボタンを押した。

雨。気がつけばもうすぐジメジメした季節が来る。洗濯物が乾きが悪くなるから嫌だ。

こんな主婦染みたことを思いながらパソコンの画面を眺めていたのは耕平だった。パソコンで写真の整理をしていた。今年会社で花見をしたもの、去年の秋は夕子と紅葉を見に京都へ行った写真。自分が転勤になったらこうやって簡単に旅行へも行けなくなるのだろうか。そんなことをぼんやりと考えていた。

数日前に、久々の平日のデートで突然あんなことを言ってしまったのは夕子も動揺しただろう、いや、していた。

夕子は元々顔に出やすいタイプだ。自分が言った言葉を何度も反すうしながら、あの日一緒にした夕食を口にしていたに違いない。味もわからなかったかもしれない。帰り道で言えばよかっただろうか。でも今さら遅い。電話してみようか。でも何を夕子に言っただけられるだろう。話が正式に決まってから言えばよかったのか。でもそれでは急過ぎて夕子が心の準備ができない。

周到過ぎた自分の行動を生まれて初めて悔やんだかも知れない瞬間だった。そのとき、耕平の携帯電話が呼び出し音と共に光る。見た事のない電話番号だった。

昨日会社帰りにコンビニで買った雑誌を眺めてはページをめくる。夕子は気づかないうちに雑誌を読むのではなく、ページをただめくる行為をしていた。やっぱり気づいたら耕平のことを考えている。そんなとき、夕子の携帯電話が低い唸りをあげて光った。画面を見ると、意外な人物からだった。もちろん澤井はるかである。

「もしもし」

「あ、夕子さん」

「どうしたの？めずらしいじゃない」

「あの…今電話しても大丈夫ですか」

「もちろん。今家だから」

「私、見ちゃったんです」

「…もしもし」

少し訝しげに電話に出たのは耕平。

「もしもし、あの…」

遠慮がちに出たのは女性の声だった。どこかで聞いたことのある声だった。

「あの…もしかして絢子さん？」

「よくわかったね。急に電話してごめん」

「いえ。それよりどうかしたんですか」

電話の向こうは車が水を弾きながら走っていく音がする。絢子は外にいるようだった。

「私、振られちゃった」

「え？」

絢子が言ったことが聞き取れなかったわけではなかったが、なんだか聞き返してしまった。

「男に振られたのよ」

「それで雨に濡れてるわけですか」

「まさか。そんな悲劇のヒロインなんて演じないわよ」

笑いながら絢子は頭から滴り落ちる水滴をずぶ濡れのハンカチで拭っていた。なんだか耕平に今の自分をどこから見られているような気分になった。凶星だったが肯定することは自分のプライドが許さなかった。

「付き合ってる人、いたんですね」

耕平はただ、感想を述べた。

「ねえ、今から飲みに行こうよ」

耕平の言葉には答えずに、絢子は耕平を誘った。

「今からですか」

「そうよ。都合悪い？」

「悪くはないですけど…」

なんだか歯切れの悪い返事をしてしまった。

「彼女に悪いわよね」

「何言ってるんですか」

夕子の存在を隠したいがために、つい言ってしまった。

「じゃあいいわよね」

「今どこですか」

耕平はつい絢子の押しに負けてしまった。心の中では大きなため息をついた。

澤井はるかもう一度言った。

「私見ちゃって…」

「何を見たの」

「私の隣の、田口さんのことなんですけど」

田口美奈子は夕子の会社に10年在籍しているベテランだ。会社でははるかの隣に座っている。

「田口さん？どうかしたの」

意外な名前に夕子は少し驚いた。

「田口さん、社内メールで隣の係の瀬戸さんとメールのやりとりをしているみたいなんですけど」

瀬戸は美奈子の恋人だ。美奈子の方が瀬戸より2歳年上だった。二人が付き合っているのは、みんななんとなく知っている。

「それで？」

「ただやりとりするだけなら何も問題はないと思うんですけど、お金のことで揉めているみたいで」

「でも本人同士の問題じゃないの。あんまり首を突っ込まないほう

「がいいよ」

「それが…どうもメールの内容見ると、会社のお金みたいなんです。どうも横領しているみたいに感じました」

「どうしてメールを見れたの？」

夕子は早く電話を切ってしまいたいと思いながらも、続きが気になっってしまった。

「その…いけないとは思ってたんですけど、田口さんが個人メールを開くときのIDとパスワードが見えてしまったので」

「つい見たってこと？」

「はい…」

最後にはるかには罰の悪い返事をした。夕子は犯罪の片棒を担がされたような気がした。

「ねえ、はるかちゃん」

「はい」

「私以外にそのことを話した人はいるの？」

「いません。夕子さんが初めてです」

「じゃあ私はその話は聞かなかったことにするから。あなたも忘れて」

「でも…」

「だってもしも会社のお金で揉めていても私たちには解決できないじゃない。それに、変に首突っ込まないほうがいいって」

「そうですねか…」

「それにはるかちゃんももう人の個人情報盗んじやってるんだし。」

私黙っておいてあげるからさ」

「それが、私夕子さんにこのことを言ったのはそのお金のことで、西野さんの名前が出ていたからなんです」

「西野…さん」

夕子は一瞬はるかかの言葉に反応できなかったが、西野とは耕平のことだ。西野耕平という。

「お二人が付き合っているのは、知っていました」

おずおずとはるかが言った。

「いつから？」

もう隠しても仕方がないと思い、夕子は聞いた。

「つい最近なんです。実はお二人がいつも待ち合わせている場所って私の帰り道なんです」

「それで私に知らせてくれたの」

「最初は興味本位で見えていたんですけど、西野さんの名前が出てきたときには、早く夕子さんに知らせなきゃと思って」

「だから最近ずっと誘ってくれていたのね」

「そうなんです」

「でも、彼の名前はどっして出ていたの」

「それが…どうもそのお金の横領の罪を西野さんに着せようとして
いるみたいで」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6763/>

交差

2010年10月8日22時31分発行